SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

音楽科授業案(各教科の概要・授業案：音楽科)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 知代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024630

音楽科授業案

授業者　横山　知代

1　日　　時　平成29年11月9日（木）10：00〜10：50

2　学　　級　1年B組（男子16名　女子24名　計40名）

3　題 材 名　能管で表現してみよう

　教 材 名　能管　手組「晒」

4　題材目標

（1）各要素と題材目標の関連

意識した要素	題材目標
【要素A】 自分なりに音楽表現を工夫したり，思いや意図を音楽で表現したりするための技能 曲想と音楽の構造や背景との関わり及び音楽文化についての理解	・「晒」の練習を通して，能管の基本的な奏法を身に付けることができる。（技能） ・「越後獅子」を鑑賞する活動を通して，我が国の伝統音楽である長唄についての理解を深めることができる。（鑑賞の能力）
【要素B】 多様な音楽表現のよさや美しさを味わい，音楽の意味や価値を生み出す力 知識や技能を得たり活用したりして，音楽表現を創意工夫し，どのように表すかについて思いや意図を生み出す力	・能管の表現を視点に鑑賞することを通して，長唄における能管の役割や意味について考えることができる。（鑑賞の能力） ・「晒」の練習を通して，能管の表現の特徴を捉え，手本に近づけるためにどのように演奏するかについて思いや意図をもつことができる。（創意工夫）
【要素C】 音楽の学習に主体的に取り組む態度 我が国の音楽文化への愛着	・能管の音色や奏法の特徴を感じ取り，より手本に近づく演奏を求めて主体的に表現しようとすることができる。 ・能管を演奏する活動を通して，我が国の音楽文化に親しみや愛着をもつことができる。（関心・意欲・態度）

（2）要素育成の判断基準（特に意識したもの）

【要素A】自分なりに音楽表現を工夫したり，思いや意図を音楽で表現したりするための技能

評価方法：練習時の観察・追究用紙の記録・発表時の演奏	
3	「晒」を正しい音で演奏し，姿勢・構えに意味を見出し美しい所作を実現し，それぞれの表現を良く聴き，能管固有の音色や響きのよさや味わいをとらえて表現することができる。
2	姿勢・構え・演奏の一連の動作を，正しくおこなうことができる。
1	姿勢・構え・演奏の一連の動作を，正しくおこなうことができない。

【要素B】知識や技能を得たり活用したりして，音楽表現を創意工夫し，どのように表すかについて思いや意図を生み出す力

評価方法：練習時の観察・追究用紙の記録	
3	手本の演奏に近づけるためには，どのような息づかいで，どの程度の音量・音色で演奏したら良いか，また独特な吹き始めの音を知覚し，同じように発音するためにはどうしたら良いか創意工夫することができ，他者にもアドバイスすることができる。
2	手本の演奏に近づけるためには，どのような息づかいで，どの程度の音量・音色で演奏したら良いか創意工夫することができる。

1	手本の演奏と自分の演奏の違いを知覚できず，奏法の特徴と息づかい・音量・音色などを結び付けて考えることができない。

【要素C】我が国の音楽文化への愛着

評価方法：追究用紙の記録	
3	我が国の音楽文化への親しみや愛着がこれまでよりも高まった姿となり，他の楽曲や表現方法，その他の伝統音楽への関心へと思いを広げることができる。
2	我が国の音楽文化への親しみや愛着がこれまでよりも高まった姿となる。
1	我が国の音楽文化に関心がもてない。

5　題材について

（1）教科テーマと題材との関わり

生徒は，長唄を聴いた時に「日本らしさ」を感受する。そして，歴史や特性を学習していく中で，我が国の音楽文化としての理解を深めていく。無意識に感じていた，単に「日本らしい」と感じていたものを，長唄というひとつの音楽の存在として意識できるようになる。そして実際に長唄で使われている楽器を体験することによって，実感を伴ってその表現の特性や価値について考えることができるようになる。

サブテーマである「表現の実感を伴う聴取活動」を意図的に取り入れ，授業を構成していく。鑑賞の授業において，聴くポイントを絞ることにより，曲中の限られた音に集中し，さらに追究して音楽を形づくっている要素同士の関連やその働きについて知覚・感受することができる。それと同様に，表現活動においても「聴くこと」を意識することで，正しい表現，もしくはイメージどおりの表現へと近づいていくと考える。「聴くこと」を音楽活動の軸とすることで，音楽科の教科テーマである「無意識的感受を意識化する授業づくり」を実現していく。

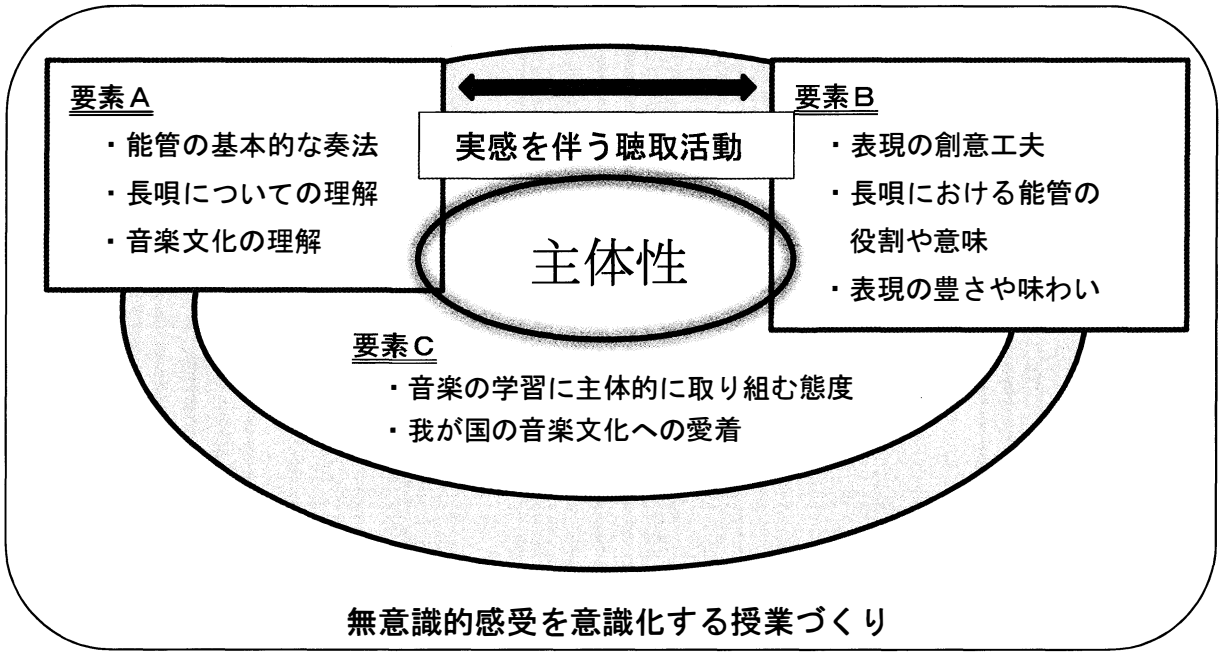
能管は，これまで生徒が体験している器楽教材とは異なり，調性を持たないという特性がある。音そのものの表現力に魅力がある楽器である。また，演奏中には基本的には手元も楽譜も見ない。そのため，奏法も含めた自己のイメージどおりに演奏できているかどうかは，主に「聴くこと」で判断することとなる。楽譜は存在するが，西洋の楽譜のように細かな表現に関する指示はない。唱歌を覚えながら，曲の構成を知覚し，実際に楽器を持って練習する際には楽譜から離れ，音に集中することができる。また，各自の息遣いそのものが音色へと直結するという点からも，表現活動の中で自然と「表現の実感を伴う聴取活動」へと結びつく題材であると考えられる。

我が国の伝統音楽は，簡単な楽譜は存在するが，基本的には師の手本を真似て習得していくという伝承方法をとる。師の手本を真似て自分の表現技能を高めるには，「聴くこと」が不可欠である。正しい音がどんな音であるか聴く，自分の発している音は正しいのか聴く，手本と自分の音を聴き比べる。このようにして聴取したことを基に，自分が目指す音に近づくにはどうしたらいいのか考え工夫していく。能管を演奏し互いの演奏を聴きあったり自己の表現とむきあったりする体験をもって，音楽表現の豊かさを実感していく姿を期待する。

「晒」は，歌舞伎囃子および黒御簾音楽の手のひとつで，長唄「越後獅子」の終曲部分に用いられている手である。手組として歌舞伎の演目にも使われているため，今後の鑑賞教材へと関連づけて取り扱うこともできる教材である。２年次の教材となる歌舞伎の鑑賞でも，長唄や能管に視点がむくことを予想でき，系統立てた授業展開も実現できる。また，曲中に５つの音しか使われておらず，反復の多い構成となっているため，基本的な奏法を身につけるのに適した作品である。

器楽教材として「演奏できた」という達成感を味わわせるだけでなく，楽器を体験することで実感を伴って音楽表現の豊かさや美しさに気づかせる手立てとなること，そのために「聴くこと」の重要性を授業者として意識化してくことが大切であると考える。

伝統音楽は，特別な場所で特別な人が演奏しているという印象を持つ生徒が，自ら体験することにより，親しみや愛着を持ち，他の楽曲や他の伝統芸能などへ意識をむけたり興味を広げたりするきっかけとなることを期待する。



【図１　本単元で意識した各要素の構造図】

（２）指導計画（５時間扱い）

時	授業内容	主な要素		
		A	B	C
第１時	＜鑑賞：長唄＞ ・長唄との出会い　越後獅子を鑑賞し，感想を伝え合う 長唄について学習する ・唱歌との出会い　唱歌を体験し，再度鑑賞する 最初に鑑賞したものと比較し，聴き方の変化を振りかえる。 【要素Ａ】（鑑賞の能力） 【要素Ｃ】（関心・意欲・態度）	○		◎
第２時	＜能管を吹いてみよう＞ ・あいさつ，姿勢，構え方について学習する。 ・音の出し方を学習する。 ・呂音と甲音，ヒシギの音の出し方を学習する。 【要素Ａ】（鑑賞の能力） 【要素Ｃ】（関心・意欲・態度）	◎		○
第３時	＜唱歌をマスターしよう＞ ・手組「晒」を鑑賞する。 ・「晒」の唱歌（能管）を覚える。　【要素Ａ】（表現の技能）	◎	○	
第４時 （本時）	＜能管で手組「晒」を表現しよう＞ ・練習をする。 ・手本に近づけるための表現を創意工夫する。 【要素Ｂ】（創意工夫）		◎	
第５時	＜演奏しよう＞ ・能管　手組「晒」を演奏する。 ・互いの演奏を聴き合う。 ・能管の役割や意味について考える。 【要素Ａ】（表現の技能）【要素Ｂ】（鑑賞の能力）	◎	◎	

6　本時について

（1）授業名　手組「晒」を練習しよう（4/5）

（2）目　標

「晒」の練習を通して，能管の表現の特徴を捉え，手本に近づけるためにどのように演奏するかについて思いや意図をもつことができる。　【要素Ｂ】（音楽表現の創意工夫）

（3）授業過程

学習活動	・支援及び留意点　◎評価	形態・時間
○初めて能管を聴いた時のイメージはどんなだっただろう。 ・小さい楽器なのに，迫力がある。 ・すごく高い音で響きがあった。	・第１時の鑑賞で各自が感受した能管のイメージを振り返らせることで，能管の持つ響きのイメージをもたせる。	一斉 ５分
○唱歌の確認をしよう。 ・速さやリズムは合っているかな。 ・数字譜も確認しよう。 ・息継ぎも忘れないようにしよう。	・言葉の暗記だけにならないように。拍感や息継ぎ、ニュアンスも確認する。	
○能管で表現してみよう ・唱歌を歌うようにはスムーズにはいかないな。 ・ゆっくり言ってから，吹いてみよう。 ・全体的に息のスピードが必要だ。 ・前時で見た手本を聴きたい。		個人 ５分
○唱歌を思い浮かべながら手本を聴いてみよう。	・手本の演奏と自己の唱歌が対応しているか問いかける。	
手本に近づけるためには、どのように演奏したらいいのだろう？		
○自分の演奏と，何が違うのだろう。手本に近づけるには何をどうしたらいいのだろう。 ・最後は「ひぃーいっ」と聞こえる。最後が強く聞こえるからもっと息を使うのかな。 ・出だしが，はっきりしているのを真似してみよう。 ・「ヒャ」の所は，音が重なった感じがするけれど，どう演奏したらいいのだろう。	・手本に近づけた表現ができるよう，よく聴くことを促す。 ・仲間の気づきや演奏もよく聴いて，互いに助言し合えるよう声掛けしていく。	小集団 30分
○こだわったり工夫したりしたことを，伝え合おう。 ・自分が思っているよりも，息のスピードを出さないと，手本のような音にはならない。 ・音と音との間で息の流れをとめると手本のようにはいかないから，息継ぎの場所に気をつけた。 ・音を出すときに，指を打つ奏法を入れてみた。	◎能管の表現の特徴を捉え，手本に近づけるためにどのように演奏するかについて思いや意図をもつことができる。【要素Ｂ】（音楽表現の創意工夫）	一斉 10分
○もう一度，演奏してみよう。	・２グループに分けて合わせて，互いに聴き合えるようにする。	

音楽